第544号
令和８年
6月20日

すまいるたうん

発行元
東京新聞
南千住専売店
TEL3803-1781
発行責任者
鬼塚　佳代子
TEL090-2657-0300

記憶を記録
三の輪新開地ー語り部の記憶ー

1999年創刊した「みなみせんじゅまいたうん」、そして「すまいるたうん」では、地域に残る写真や記憶を集め続けてきました。

本書『三ノ輪新開地―語り部の記憶』には、各家庭のアルバムから掘り起こされた約200枚の写真と、そこに暮らした人々の貴重な証言が収められています。

関東大震災を12歳で体験した小林マツさん（明治44年生まれ）は、「商店街の長屋が傾き、屋根同士がくっついた」と語っています。余震が続く中、大八車に荷物を積み、親戚宅へ疎開した記憶も残されています。

五十嵐春雄さん（大正14年生まれ）は、「戦前、新開地にはさまざまな物売りが往来していた」と懐かしく振り返ります。キセルの掃除をする「ラオ屋」、薬を売る「定斎屋」、そして天びん棒の両側に桶を下げ、「金魚え、金魚」と独特の節回しで歩く「金魚屋」の姿も、当時の日常風景でした。

松田達弥さん（大正9年生まれ）は、かつての商店街の一日をこう振り返ります。店は朝7時頃に開き、夜11時過ぎまで営業していました。映画館「三ノ輪座」の終映時間が閉店の目安であり、後に「夜10時には閉店しよう」という申し合わせができて、ようやく少し楽になったそうです。

松田進さん（昭和25年生まれ）は、昭和30～40年代の新開地を思い出します。スマートボール場があり、駄菓子屋が並び、子どもたちは商店街でローラースケートを楽しんでいました。鉄輪の音が響くたび、三ノ輪座のリール（フィルム）を運ぶ人によく叱られたといいます。

宇田川誠寿さん（昭和12年生まれ）は、「赤電になるまで店を開けていた」と語ります。月に一度しか休みがなく、深夜まで働くのが当たり前だった時代。赤く表示された都電の終電は、人々から親しみを込めて「赤電」と呼ばれていました。

また、近江屋呉服店の山本孝子さんのお話には、かつて商店街に4軒もの呉服店があったことや、近くの演芸場で幼い頃の美空ひばりさんが歌ったというエピソードも残されています。

漫画『こちら葛飾区亀有公園前派出所』にも描かれ、『帰って来たウルトラマン』最終回のロケ地にもなった東京スタジアム、そしてその前身である千住製絨所から大和毛織で働いた方々の記憶も、写真とともに紹介しています。

花電車、買物かごを持った人々が行き交う商店街、都電脱線事故、天王祭、イトーヨーカ堂の屋上遊園地――。そこには、時代を生きた人々の暮らしが息づいています。

旅行や行事の写真は残っていても、当たり前だった日常の風景は意外と残されていません。しかし、人々が本当に懐かしむのは、そうした何気ない日々の暮らしです。写真の中では、時間が静かに止まっています。

アナログの記録だからこそ伝わる、ゆっくりとした時の流れと温かさ。その一枚一枚の向こうには、人々の人生と時代の歩みがあります。

語り部たちの記憶とともに、懐かしい三ノ輪新開地へタイムスリップしてみませんか。

三の輪新開地　ー語り部の記憶ー
定価1400円（税込み）
販売場所　縁処　三ノ輪新開地（南千住1－26－9）
ジョイフル三の輪商店街
お問合せ090（2657）0300　　鬼塚